

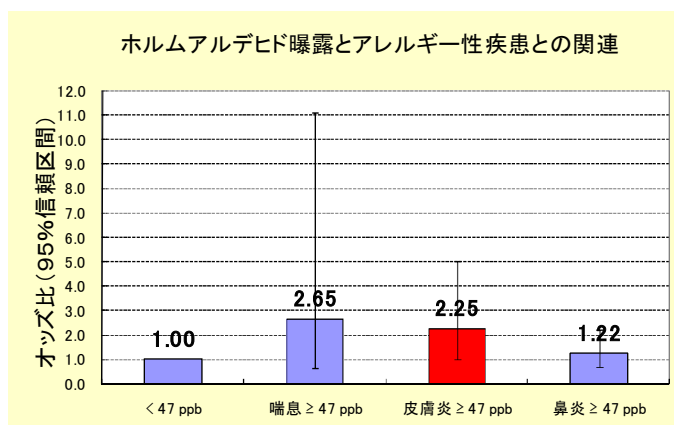
大阪母子保健研究ベースラインデータの結果 ホルムアルデヒド曝露とアレルギー疾患有症率との関連

背景：屋内でのホルムアルデヒドなどの揮発性有機化合物の曝露は避けられません。ホルムアルデヒド曝露とアレルギー疾患に関する疫学研究は世界的にも少なく、結論は得られておりません。

方法：大阪母子保健研究のベースライン調査に参加した1002名の妊婦さんを対象としました。日常のある日に、妊婦さんが24時間パッシブサンプリングチューブを装着し、ホルムアルデヒド濃度を測定しました。最近1年の間に喘息の投薬治療を受けた場合を喘息有り、最近1年の間にアトピー性皮膚炎の投薬治療を受けた場合をアトピー性皮膚炎あり、最近1年の間にアレルギー性鼻炎（花粉症も含む）の投薬治療を受けた場合をアレルギー性鼻炎ありと定義しました。交絡因子として、年齢、ベースライン調査時妊娠週、子数、喘息、アトピー性皮膚炎、アレルギー性鼻炎の家族歴、喫煙歴、受動喫煙、台所のカビ、屋内のペット、家計の年収、教育歴、寝具のダニ抗原量を補正しました。

結果：ホルムアルデヒド濃度の分布は中央値が24ppbで最大値が131ppbでした。90パーセントイルの47ppbで2群に分けて解析したところ、47ppb未満に比較して、47ppb以上でアトピー性皮膚炎の補正オッズ比が2.25（95%信頼区間：1.01-5.01）と統計学的に有意な正の関連を認めました。喘息

では補正オッズ比が2.65でありましたが、統計学的に有意ではありませんでした。アレルギー性鼻炎とは特に関連を認めませんでした。



考察：ホルムアルデヒド曝露とアトピー性皮膚炎有症率との正の関連を世界で初めて報告いたしました。

出典： Matsunaga I, Miyake Y, Yoshida T, Miyamoto S, Ohya Y, Sasaki S, Tanaka K, Oda H, Ishiko O, Hirota Y, The Osaka Maternal and Child Health Study Group. Ambient formaldehyde levels and allergic disorders among Japanese pregnant women: baseline data from the Osaka Maternal and Child Health Study. *Ann Epidemiol.* 2008; 18: 78-84.